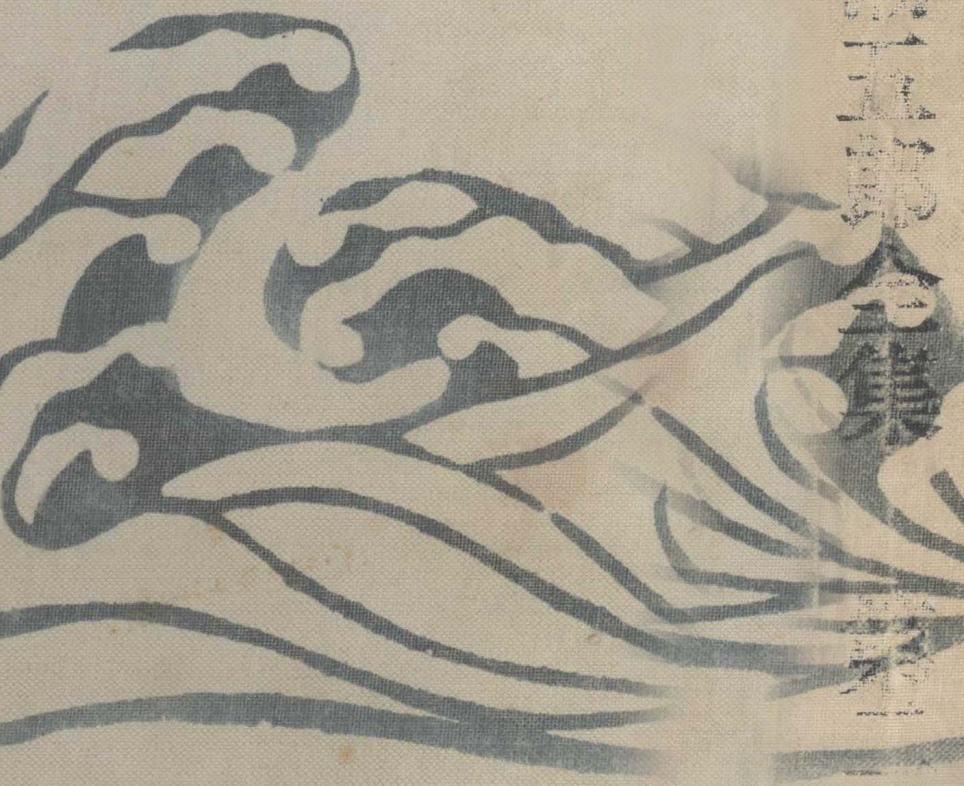


蓮音寺潮五郎

全集

卷一





卅

海音寺
潮五郎
全集

海音寺潮五郎全集 第二十卷

幕末動亂の男たち

全三十一卷・第十六回配本

九〇〇円

昭和四十六年一月二十日発行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銑介

口絵 中尾進

発行者 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

目次

幕末動乱の男たち

有馬新七	三
平野国臣	三
清河八郎	六
長野主膳	九
武市半平太	一六
小栗上野介	一七
吉田松陰	二〇
山岡鉄舟	二六
大久保利通	二九

三刺客伝

三〇

田中新兵衛

岡田以蔵

河上彦斎

日本名城伝

熊本城

三七三

高知城

三八五

姫路城

三九六

大阪城

四〇八

岐阜城

四二〇

名古屋城

四三二

富山城

四四三

小田原城

四五五

江戸城

四六六

会津若松城

四七九

仙台城

四九一

五稜郭

五〇三

幕末動乱の男たち

昭和四十二年二月—四十三年二月「小説新潮」

有馬新七

一

西郷隆盛が月照とともに入水して、救い上げられて蘇生した後のことである。

西郷はずいぶん衰弱していたが、元来強壯な体質だったので、およそ二十日も経つと、回復した。しかし、それはからだだけで、精神的には打撃から立直りが出来ないような風であった。元来快活で、豪快な冗談を言つては人を笑わせることが好きであつた男が、たえてそういうことがなくなり、よく物思ひに沈んでいる。月照一人を死なせたこと、とりわけ、死にそこなつたことを武士としてあるまじきことと恥じているのだと思われた。

西郷の同志らは、西郷はまた自殺するのではないかと案じて、刀、脇差、その他一切の刃物を、西郷の目のとどくところにおかないように、家人らに注意したほどであつた。

彼らはよりより相談して、西郷の氣ばらしと、再生を祝うために、祝宴をひらき、その余興に、西郷の大好きである角力を同志で行うことにした。

その招待を受けた人の中に、本篇の主人公有馬新七の叔父坂木六郎がいた。六郎は城下士ではなく、鹿児島城下から二十キロの地点にある伊集院郷の郷士であつた。元来、有馬の父四郎兵衛は坂木家の長男に生れたのだが、城下士有馬家のあとをつぎ、坂木家の家督は弟の六郎にゆづつたのであつた。

六郎は、西郷入水の時六十二という老人であつたが、剣は神影流の名手であり、学問の造詣も深く、当時の老年の人にはめずらしく、鋭い時勢眼もある人だったので、西郷一派の、当時の薩摩の志ある青年ら（これを誠忠組という）にも、尊敬されていた。だから、招待もされたのである。

六郎老人は、もとより西郷の入水事件は知っている。そのいきさつも知っている。

「それはよかことでござす。必ずうかがわせていただきますぞ」

と、使いの者に答えた。

ところが、その当日、なかなかその姿が見えない。

「六郎サアは、一旦約束召されたことをたがえるようなお人ではなか。何か事情がおこつたに相違なか。様子を見に行つてみるがよから」

ということになって、一人が伊集院の方に走ると、途中で老人の来るのに会った。連れ立って帰って来ると、角力は今をさかりとなっている。

老人は西郷にたいして快氣の祝いを言った後、一同にむかつて、

「本日はせっかくお招きを受けたのに、にわかに持病のおこりがおこりもして、遅参して、失礼しました」

とあいさつした後、羽織・袴をぬぎすて、素っぱだかになり、

「わしは老人でござす上に、今日は病氣がおこりもしたので、とうていおはん方のような若かお人達と角力はとれもはんから、押しなりとしてごらんに入れもそ」

といいながら、たずさえて来たシメコミをしめはじめた。

さすがの壮士らもおどろいて、

「そげん無理を召してはいきもはん。先ず先ず、今日はわたし共若かもの共の角力をごらんなさるだけにしていただけとござす」

ととめ、着物を着せて席につかえたというのである。

有馬新七はこのような、豪爽な叔父を持った人であった。

彼の父四郎兵衛は、少年の頃から文武出精の名があり、藩から褒賞を受けたほどの人であるが、中年の頃、島津家の姫君（郁子）が近衛忠熙に入興した時、付人の一人にえ

らばれて上京し、弘化四年六十三で死ぬまで、十余年の間京にいて、近衛家につかえていたのである。

新七は生来、激烈・純粹の性質の人であった。彼自身も

その自叙伝に、「天性激烈で、暴悍で、長者の教えに従わず、しばしば叱られた」と書いている。こんな性質である

ところに、時代の思潮に尊王賤覇の傾向があったので、彼の思想ははげしくこれに傾斜している。彼の十三の時、十

二代將軍家慶が、將軍宣下を受けているが、彼は国許にいてこれを聞き、父にいきどおりの手紙を書いている。

「徳川が將軍宣下を受けたということですが、これは京に上ってお受けすべきで、江戸にいながらお受けするとはけしからんことです」

これに對して、父四郎兵衛は、

「將軍はかしこくも天皇から大將軍の職任をこうむられたのだから、徳川などと呼びすてにしてはならない。徳川公と書くべきである」

と訓戒してやっている。

このような彼が、間もなく崎門学（山崎闇斎派の朱子学）の洗礼を受けたので、その性質と思想とは一層純粹・

激烈となった。崎門学は朱子学といわず、あらゆる儒学の中で、最も大義名分を重んじ、その学風の激烈で純粹なこととは、学祖の闇斎以来のことである。

自叙伝によると、彼は十四歳の時から崎門学を修めて、

友人らとともに「靖献遺言」（闇斎の高弟浅見綱斎の著

書。中国の忠臣烈士の列伝であるを講習したとあって、師匠の名が出ていないから、崎門学を学んだというのも、師匠にはつかず、その学派の人々の著書を手に入れて自習したのであろう。つまり、たまたまついた師匠が崎門学の人であったというのではなく、自らの好みによってこの学派をえらんだのである。

十九の時、江戸遊学の藩許を得て、途中京の父の許にしばらく滞在して、江戸に行き、闇斎学の泰斗である若狭小浜の藩士山口菅山の門に入ったが、翌年からは師の代講をするほどとなったことを自叙伝にしている。よほど精励したのであろうが、山口門に入るまでに独学で相当深いところまできわめていたのであろう。

この翌々年、京都に来て、梅田雲浜と深い交り（まじわり）を結んでいる。これは山口菅山の紹介だったに違いない。雲浜は前小浜藩士であり、また崎門学の人であるからだ。平凡社版の「大人名辞典」によると、菅山の弟子である。

新七が維新運動の舞台に登場するのは、井伊直弼が大老となつて、あの強烈な弾圧政策をとりはじめた時からであるが、その時までには、彼は父の死に遭って家督を相続したり、結婚して子供が生れたり、蔵方目付や江戸藩邸糾合方（学園所校合方である。図書がかりである。助教もつとめるのである）になつたり、四方を遊歴して見聞を広めたりしている。井伊の弾圧政治のはじまった安政五年には、三十四であった。

井伊が大老となつて、独断的な政治をとりはじめた時、天下の諸藩は非常な衝撃を受けたが、とりわけ、薩摩藩は最も強烈なものに感じた。

薩摩藩主島津斉彬は、この前年から国許にかえっていたが、最も気に入っている家臣西郷隆盛を中央に出して、越前藩主松平慶永を助けて、一橋慶喜を將軍世子に立てる運動をさせていた。

当時の將軍家定は病弱で、いささか精神薄弱で、とうてい内外の難局に処し得る人ではなかったので、賢明な將軍世子を立て、これに政治を処理させるがよいというのが、当時の最も進歩的分子の意見であった。譜代・外様を問わず、賢諸侯といわれる人々、幕府内の優秀分子、皆この説を持しており、最も熱心に運動していたのは、越前慶永であった。

西郷は中央に出て、慶永の謀臣である橋本左内、中根鞆負（雪江）らと提携して、大いに働いたのである。

しかし、今年の四月、井伊が大老に就任すると、当時最もやかましい問題であったアメリカとの通商条約を無効許で（というより朝廷の意向を全然無視してだ）取結び、つづいて將軍世子を紀州慶福（後の家茂）にきめたばかりか、強烈な弾圧政策を強行しはじめた。自分の方針に反対の者を弾圧しはじめたのである。水戸公父子、尾張公、一橋慶喜等の三家、三卿、家門にも容赦はなかった。人々は慄然として恐れ、口をつぐんだ。西郷はこの形勢に、

「もはや、口舌のおよぶべきところではない」

と、見切りをつけ、国許に急行して、斉彬にこれを報告し、自分の意見をのべた。

斉彬はうなずき、

「わしもそう見た」

と言つて、思い切った対策を披露した。

「井伊を廃し、幕府の改革を行えとの勅旨を朝廷から下してもらい、兵をひきいて上京し、勅旨をふりかざして幕府に迫り、聞かずんば討つとおびやかして、無理にも聞かせる」

という策。クーデターである。

「その方は、大儀ながら、また京都に引返し、朝廷への運動、兵の宿舍の準備等をしてくれるよう」

と、斉彬は言つた。

西郷はよろこびに燃えて、京都に引きかえし、着々と準備をととのえた。

以上のことは、西郷からの知らせで、江戸藩邸の同志らにも知らされた。人々は空を蔽う一面の暗鬱な雲の中に青天のひらけて行くのを見る思いで、よろこびに沸き立ち、首を長くして、斉彬の上京を待った。新七もその一人であつた。

ところがだ、七月下旬、思いもかけない知らせが国許からとどいた。

「去る七月十六日、太守様が永眠された」

というのである。

おどろきもし、疑いもしたが、事実であつた。斉彬は計画実行の準備のため、連日炎天の下に、鹿児島郊外の天保山の調練場で、ひきいて出て行く兵らを猛訓練していたが、この八日から痢病にかかり、次第に衰弱がつり、十六日の夜明け、ついに空しくなつたのである。遺言によつて、後嗣には弟久光の長男又次郎が立つことになつたという。

新七らの悲しみと失望は言うまでもない。

「天ついに日本に幸いせず」

と悲嘆し、絶望の淵にしずんだ。

斉彬について立つという又次郎が、斉彬の志をつぐということは考えられないことであつたのだ。

二

一体、斉彬が薩摩の当主になつたことについては、まことに複雑な事情があつた。

ずっとずっと以前、薩摩はひどい財政難に陥つていた。諸藩の財政難は江戸中期以後は軒なみなことで、薩摩だけの特殊現象ではないのだが、薩摩のそれは最も深刻なものがあつた。藩債実に五百万両というのだ。その利息だけでも五十万両以上かかり、年々の藩の費用が十九万両必要なのに、歳入はわずかに十四万両だつたというのだから、窮迫のほどがわかう。

五百万両の負債の大部分は、いく世代の間に出来たのだが、それが一時にグイと重くなったのは、斉彬の曾祖父重豪の時からである。

重豪は積極的で、はで好みで、豪放で、三百諸侯中第一の豪傑といわれ、幕府の老中にも手こずることがしばしばだった人である。彼は生れ時を間違えた、あの不運な英雄の一人であった。戦国の乱世か、維新の風雲期に生を享くべき人物だったのに、江戸中期に生れたのが、彼の不運であった。碁盤の目割のように封建の組織がきちんと立ち、万事が因襲と先例がらめになっている時代に生れ合せたので、その鬱屈する英雄的気魄は途方もなく進歩的な藩政となり、ケタはずれに豪華な私生活となった。

藩費造士館をはじめ、医学館をひらき、天文台を設けて薩摩暦を出し、西洋の文物が好きでシーボルトらの西洋人と交際したり、膨大な「成形図説」（博物全書）や「南山俗語考」（中国語辞典）などを編纂したなどは、先ず賢君的業績だが、薩摩人の固陋を矯正すると称して、都会風な遊楽機関——三都同様な角力興行場や、芝居小屋や、遊女屋町などを城下に設けて、遊興やぜいたくをすすめたのは、はなはだしい行きすぎであった。

十一代将軍家斉は歴代の将軍中最も豪華な生活をした人だが、この家斉の夫人は重豪の女であった。家斉がまだ一橋家にいた頃に縁づけたのだ。この家斉が隠居して大御所となる時、

「わしは薩摩の岳父殿のようにやりたい」といったというから、重豪の生活態度の大体がわかるであらう。

重豪は五十六の時隠居して、息子の斉宣に家督を譲ったが、斉宣が藩政立直しのために緊縮政策をとり、彼の時代の方針を改めようとすると、立腹し、斉宣を隠居させ、斉宣の子斉興を立て、自らその後見となって藩政をとり、依然たる放漫積極の政策をとりつづけた。もちろん、借金によってまかだったのである。

しかし、いつまでもこんなやり方がつづけられるものではない。三都の大町人らが金を貸さなくなったのだ。利息ももらえず、返済されるあてもない金を貸す阿呆はいないのである。

こうなると、参勤交代の費用の出場所もない。人足共に払う金がないから、人足共が集まらず、朔望（一日、十五日）の登城にもさしかえらる。藩邸が破損して雨もりしても、修理が出来ない。江戸詰の家来などは扶持も手当ももらえない。家中の武士は、男は刀の目貫や小束をはずして献納し、女は髪かざり売って献金したが、そんなものは焼石に水だ。ある時、重豪が金二分入用なことがあって、江戸の七つの屋敷を全部さがさせたが、どこにもなかったもので、さすがの豪傑隠居が、

「ああ、おれの貧乏もこれほどまでになったか」と、嘆息したという。

藩士らの窮乏はいうまでもない。知行持ちは知行を借上げられ、扶持取りもまたそうだ。領民はもちろん苛斂誅求される。薩・隅・日三州の地は三面海にかこまれて、領民が他に逃げ出すたよりのない地勢だが、それでも北方は他領に接している。だから、この地方の百姓らはきびしい監視の目をくぐって、さかんに逃散した。多くの生れ在所は薩摩の北端であるから、おびただしく百姓が逃散したため、島津領内の穀倉といわれるほどの土地なのに、耕すものがなくなつて、穰々たる美田地帯が原野化したといわれている。つまり、上下を挙げて窮迫したのである。

重豪もやり切れなくなつて、調所笑左衛門という人物に、財政の立直しを命じた。調所は茶坊主上りだが、才幹のある人物で、使番や町奉行を歴任し、この頃は側用人兼両隠居（重豪と斉宣）の統料がかりであつた。側用人は官房主事、統料がかりは費用がかり、財務官の一種だ。

この調所がおよそ二十年ほどの間に、すっかり財政を立て直した。いろいろな点でいふん手荒いやり方をしたのだが、ともかくも、天保十五年（弘化元年）には、百五十万両の非常準備金まで出来、江戸、大坂、国許の三カ所の金蔵に積みあげておくようになったのである。あの貧乏はもう遠い昔の記憶となつた。もつとも、この時はもう重豪は生きていない。八十九歳を一期に死んで、すでに十一年になり、藩政は斉興の親政になつてゐた。

斉彬は斉興の長男である。世子として立ててはいたが、

斉興はこの世子が好きではなかつた。斉彬は弘化元年に三十六になつており、その賢明の名は天下に鳴りひびき、当時の賢諸侯といわれていた人々——水戸の斉昭、越前の松平慶永、宇和島の伊達宗城、土佐の山内豊信、肥前の鍋島直正、幕府部内の賢臣、新知識といわれる人々と親交があり、とりわけ当時の老中第一の人物であつた阿部正弘とは最も親しい交りがあつた。

ところが、斉興には息子のこの賢明の評判も、政治づいてゐることも、いづれも最も深い警戒を要すべきことと思われた。とくに斉興をきらわせたのは、斉彬が最も曾祖父の重豪に似ているように思われることである。斉興においては、重豪は家の財政をめちゃめちゃにしたお人としかわれないのである。

斉彬は年少の頃から重豪に鍾愛された。重豪は八十九という長寿を保つたので、斉彬の二十五になるまで生きていて、最も強い影響をあたえたのだ。

重豪は西洋好きで、とくに幕府の許しをもらつて長崎に行つてオランダ屋敷を訪れたり、蘭船に乗つたりして、西洋人と交際を結び、当時のオランダ商館づきの医者シーボルトとは親しい交際を結び、シーボルトらが江戸参府した時には、訪問し合つてゐる。こんな人だから、西洋の品物を金をおしませ買入れた。

この趣味を受けて、斉彬も西洋好きだ。斉彬の私生活は至つて儉素だが、西洋の書籍や、器械類や、兵器類や、薬

品類を買入れるには少しも金をおしまない。書籍は親しくしている蘭学者らに依頼して翻訳させ、それを読む。

子細に観察すれば、重豪の西洋好きは単なる趣味であつたに過ぎないが、斉彬のは日本の将来を思つての実用的なものであることがわかるはずであるが、そこまでは斉興は見ない。

「柴翁様（重豪）によく似て」

とだけ思つて、身ぶるいする思いだ。

「この子の代になつたら、まためっちゃめっちゃなことになるのではないかし」

とも考える。二十年の苦勞で築き上げた身代がいとしくてならないのである。

斉興には斉彬と同腹の子があつたが、これは備前池田家に養子となつて行つてゐる。他に側室の腹に久光というのがある。

その側室は江戸の町人岡田氏の女由羅（よろ）という。美貌でもあり、才氣もすぐれていたので、斉興は大いに気に入り、参観交代で江戸に出る時は江戸にともない、国入りする時には国にともない。つまり、片時も側を離さないのである。久光は国許で生れ、国許で育つたのである。

生れながらの性質もそうであつたのであろうが、薩摩のようなどころで育つたためであろう、久光は質朴で、剛健で、保守的な性質であつた。ずいぶん利發で、学問が好きでもあるが、その学問の好みは国学と漢学で、洋学はきら

いである。斉興には、重厚で、堅実で、最も好ましい性質に見える。

「この子が長男で、斉彬が次男であつてくれたら、よかつたろうに」

と、思わずにいられない。

しかし、斉彬を廃嫡するわけには行かない。出来るものなら、そうしたいのであるが、斉彬は薩摩の世子として、すでに官位を持つており、柳営での席がある。賢名が天下に聞えている。廃嫡は出来ないのである。

最も陰險なことがはじまつた。法術者に命じて、斉彬を呪咀調伏することになったのだ。斉彬だけでなく、あわせでその子女らも呪咀した。こうして斉彬の系統を根だやしにし、久光を世子にすえる、それまでは斉興は決して斉彬に世をゆずらないという策。

島津領内には兵道（へいどう）という呪術がある。これによれば吉慶を招来し、場合によっては憎しと思つる者を呪咀調伏することが出来ると信ぜられていた。ひそかに数人の兵道家がえらばれ、密命を受けて修法した。多くの生れ在所でも、この時、村の兵道家（多くは山伏）らが山にこもつて壇をきずいて修法したと村の古老が言つていたから、ずいぶん方で行われたのであろう。

この修法のためか、偶然の一致か、わからないが、斉彬の子女は皆夭死し、斉彬自身も時々えたいの知れない病氣になつたことは、事実である。

このようにして、斉興は六十近くになっても世をゆずらず、斉彬は四十を越しても世子の身分であった。

その頃、天下は次第に急迫して来た。欧米の勢力が日本に迫り、天下は多事の様相を呈して来ている。抱負があり、才幹の自信のある斉彬はあせらざるを得ない。一日も早く大藩薩摩の主となって、天下のことに働きたい。その頃幕府の老中首席となっていた阿部正弘も、斉彬を早く薩摩の当主にして、提携して天下のことに処したい。

二人は相談の上、薩摩が琉球を通じていとなんでいた密貿易を幕府の問題とし、これを糾察し、斉興の責任を追及することによって、隠居に追いこみ、斉彬の家督相続を実現する計画を立てた。

幕府は仕置家老の調所笑左衛門を江戸に召喚して、きびしく取調べたが、調所は服毒して自殺し、糾問の手がかりをふさいでしまった。

斉興は頑固な保守家ではあるが、かしこい人である。このさわぎの裏に斉彬のいることを察知している。

「けしからんせがれめ」

と、一層斉彬がきらいになった。

間もなく、薩摩の家中でさわぎがおこった。斉彬に好意を持つ藩士らが結束して、調所を助けて多年藩政の局にあった家老・重役らをしりぞけ、藩政を改革し、一日も早く斉彬の襲封を実現させようと申し合せ、度々会合してその方法について相談した。

ところが、このなかまにスパイがいたから、たまらないう。筒抜けに藩当局にわかり、斉興に報告された。斉興は激怒し、一網打尽におさえ、切腹、遠島、閉門等の厳罰に処した。一層斉彬を憎悪するようになったことは言うまでもない。ばくの調べたところでは、斉彬党の藩士らの画策の裏面にも斉彬の示唆がある。

こんなわけだから、斉興には隠居する気なぞ、さらに起きなかつた。百年でも当主でいて、斉彬の死を待つて、久光を世子とし、これに世を譲るつもりであつた。

以上のさわぎのあつたのは、嘉永二年から三年にかけてのことであるが、嘉永三年の暮、斉興が参観のために江戸に出て来てみると、幕府の態度がおそろしく硬化してゐた。幕閣の命を受けた西の丸留守居筒井伊賀守政憲が、「この頃公辺における貴藩の評判はまことよろしくない。一日も早く隠居なさるがよい。おくれれば、きびしい沙汰におよばうとの議になっている。早く隠居願を出されるがよい」

と、斉興の近臣を呼んで、いったのである。

斉興はねじ伏せられたような気持で、大いに不平ではあつたが、しかたはない。隠居願を出すと、即日聞きとどけられ、斉彬が襲封した。時に嘉永四年はじめ、斉興六十二、斉彬四十三であつた。

以上のような経過をたどつて当主となつただけに、斉彬には父にはばかるところがある。自分のために非業にして

死んだ家臣や遠島に処せられている者らを救済することも遠慮した。父の代の家老・重役らもそのままのこした。この者共は父を助けて自分の襲封をさまたげつづけて来たのであるが、父への面当になるようなことは慎まなければならなかった。

しかし、仕事はばりばりはじめた。別に腹心の家老や側役をこしらえ、これを使って、抱負の実現に邁進した。造船所をこしらえて西洋式の帆船や汽船を建造し、新式の大砲や鉄砲をつくり、紡織工場をおこし、電信機を実用に供し、機械水雷をこしらえ、綿火薬を製造し、鹿児島郊外磯の別邸の石燈籠全部をガス燈にした。やがて鹿児島城下の民家全部の燈火をガス燈にする計画であったという。

民政にも心を入れた。先年の財政立直し以来、領内には重税政策がつづいていたが、早速に改めたのである。

一方では、先年夫人を失って独身である家定將軍に、一族の女敬子（後に篤子）を養女として入興させ、將軍の岳父となった。これは阿部正弘の発案であった。斉彬が將軍の岳父となれば、幕府にたいして強力な発言力が出来、天下の政治にも都合がよい、また、幕制の改革にも大いに便利であると、考えたのである。大老や老中などという、幕閣の最高要員が、特定の家柄の大名に限るという制度は時代に適合しないから、改革の必要があると、正弘は考えているのである。もちろん、斉彬も同じ考えである。

間もなく阿部が病死したから、二人の画策はむなしくな

ったが、斉彬は決して志を捨てない。將軍世子に一橋慶喜を立てようとしたのも、クーデターを計画したのも、せんじつめれば、幕制改革という初志貫徹するためだったのである。

三

以上のようなわけであるから、新しい藩主が斉彬の遺志をついで国事に乗り出すことは考えられないのである。新藩主又次郎はまだ十九の少年であるから、斉興が政治後見となるに相違ないのであるが、これは最も頑固な保守主義者である。

「天下のことは幕府にまかせておくがよい。薩摩は薩摩のことだけ考えておればよい」

と、昔にかえって殻に閉じこもるに相違ないのである。

この頃、新七の同志として江戸藩邸にいたのは、新七、堀仲左衛門（後次郎、明治後は伊地知貞馨）、有村俊斎の三人であった。三人はやがて悲嘆の底から立上って、

「太守様のご計画が空しくなったのは残念至極ではあるが、われわれとしてはこのままでやむべきではない。われわれの手でご遺志を完成し申そうではないか」

と、相談をまとめた。しかし、具体的にはどうするか、それはまだ考えがまとまらなかった。

八月四日のことであったというから、その頃のことだ、西郷が京都から下って来た。西郷は水戸藩あての密勅の写